

三 あこがれの陶淵明

自由を求めて、人生の半ばで役人
活を捨て、ふるさとの田園で「農耕と
飲酒と詩作」の日々を過ごし、
陶淵明は、後世のあこがれの的^{まじ}。多くの詩人
たちが、彼を慕う詩をのこしています。



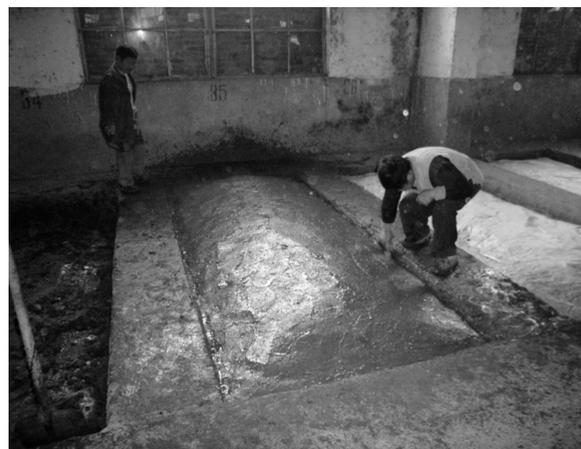
おつまみ——②白酒の醸造〈1〉

(山東省臨沂市蘭陵県の白酒工場)

中国酒は、高粱^{ガオリエン}などの穀物を原料とする蒸留酒^{バイジウ}「白酒」と、米を原料とする醸造酒^{ファンジウ}「黄酒」に大別される。



▶原料の高
粱などを蒸
す蒸籠



▲蒸した原料を醗酵菌がいる土の穴「窖^{こう}」に埋めて醗酵させる。
百年以上も使い続けられた古いものは「老窖」とよばれる。

(写真提供：酒文化研究所)

酒の前ではみな平等

山中にて幽人と対酌す

李白^①

両人 対酌 山花開く
一杯 一杯 復た一杯

両人対酌山花開
一杯一杯復一杯

我れ酔うて眠らんと欲す 卿 且く去れ

我醉欲眠卿且去

明朝 意有らば 琴を抱いて来たれ

明朝有意抱琴来

◇ 二人さし向かい 花咲く山の中で飲む

◇ 一杯 一杯 もう一杯

◇ 眠くなつたぞ 君 ひとまず帰ってくれ

◇ あす朝 また飲みたきや 琴を抱えておいで

① 「内に贈る」二八頁注①参照。

諸田 「あこがれの陶淵明」^②の幕開けです。

串田 この詩のどこが陶淵明？

諸田 種明かしはあとまわし。

串田 意地悪ですなえ(笑)。

諸田 そう言わず、まあ、一杯……。

串田 とところで陶淵明って、当時はあまり評価されなかったとか。

諸田 ええ、ほとんど。彼が生きた時代は、貴族文化の全盛期でしたから。

串田 貴族って、鹿鳴館^③じゃないけど、華麗な宴会が好みだから、淵明流の一人酒は理解されないってことですかね？

諸田 地味な酒の持つ滋味^④がわからない。

串田 うまい！ で、李白は違うと？

諸田 唐代になると違ってきます。とりわけ李白は「陶淵明大好き！」でした。

串田 この詩も飲兵衛の李白らしい詩ですね。

諸田 詩題の「幽人」は、山中にひっそりと暮らす隠者のことですが……。

② 「飲酒 其の十三」五二頁注①参照。

③ 「鹿鳴」三頁注⑤参照。

串田 今の中国は経済発展に夢中ですから、隠者なんて、もう絶滅したでしょう。
 諸田 いや、まだどこかにいそうな気がします、広大な中国ですから。
 串田 でも、今は「^④向銭看（お金しか見ない）」の中国ですからね。
 諸田 世界中がそうでしょう？
 串田 では、隠者になりますか？
 諸田 きっと私、「俗悪な隠者」にしかありませんから、止めときます。
 串田 李白と酒を酌み交わしている「幽人」は、俗悪ではないと？
 諸田 ええ、「^⑤琴を抱いて」とありますし、「高潔な隠者」です。
 串田 琴は「君子の楽器」ですからね。
 諸田 でも、李白は、そんな「君子」の前でも、
 実に自由奔放です。
 串田 ところで、一句目の「兩人対酌」という日
 本酒があるの、ご存じ？
 諸田 まさか！



李白酒造の「兩人対酌」

④ 一九七八年、鄧小平が中国の発展に前向きに取り組もうと国民に呼びかけたスローガン「向前看」をもじった成語。「前」と「銭」とは発音がまったく同じ。資本主義の導入で拝金主義に走る中国人を自ら諷して言ったもの。

⑤ 『論語』や『礼記』に孔子が好んで琴を弾じた記録がみえ、『白虎通』巻第二「礼学」に「琴は禁なり。淫邪を禁止し人心を正す所以なり」とある。琴は儒家だけでなく知識人がたしなむ教養のひ

串田 いや、ホント、あるんです。島根県の酒造会社で、
 その名も「李白酒造」ですから驚きです。
 諸田 じゃ、「^⑥月下独酌」もあつたりして。
 串田 それがあるんですよ、「月下独酌」も。
 「酒仙李白」もあります！
 諸田 中国人顔負け。社長さん、相当の李白ファンなんでしょうね。
 串田 二句目の「一杯一杯復た一杯」は、今の学生もコンパで口にするほど有名ですが、これが李白だなんて思いもしないんです。
 諸田 そもそも漢詩だとも思っていないでしょう。
 串田 「一杯」を三回も繰り返すのは、表現としても破格ですしね。
 諸田 三句目の「眠くなったから帰ってくれ」も、実に自由奔放（笑）。
 串田 「無礼者！」って、怒り出しても不思議じゃない。
 諸田 でも、これには典故があるんです。
 串田 さては、陶淵明？



「月下独酌」「酒仙李白」

とつて、陶淵明「^⑦少年行」一二六頁参照。

⑥ 李白には「月下独酌」と題する詩が四首ある。

⑦ 「少年行」一二六頁参照。